

癌患者の子どもへのチャイルドサポート介入調査

研究分担者 清藤佐知子 国立病院機構四国がんセンター 乳腺外科 医師

研究協力者 井上 実穂 国立病院機構四国がんセンター 臨床心理士

研究要旨

子どもを含めた家族に対する支援について病院でできることとして、昨年に引き続きがんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラムであるⅠ.「夏休みキッズ探検隊」を内容を発展させて実施し、参加された親（患者）および子どもにアンケート調査を行った。また、医療関係者（特に看護師）を対象とした研修・ワークショップとしてⅡ.「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」を開催し、がん医療における子どもに対する関わり方について医療関係者の理解を深めた。さらに、Ⅲ.市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」を開催し、「親」と「子」、「生」と「死」を含めた「家族」について、そして望まれるチャイルドサポートの在り方について地域住民とともに考えを深めた。

Ⅰ. では、がんの親をもつ小学生の子ども 10 名の参加があり、イベント前後で子どものストレスが有意差をもって軽減されていた ($p < 0.05$)。Ⅱ. では、38 名（看護師 31 名、医師 1 名、MSW 1 名、心理職 3 名、保育士 2 名）の参加があり、参加者アンケート回収数 34 名（回収率 88.2%）、8 割以上の参加者がチャイルドケアについては初めての受講であったが、その必要性、理解については参加者の全員に行き渡ったと考えられた。Ⅲ. では、221 名の参加があり、映画『うまれる』の上映、小児科医の講演、がん経験者の対談、臨床心理士の講演後の来場者アンケート回収数 121 名（全体の回収率 54.8%）、親ががんを患った際に子どもに話す必要性が、市民公開講座参加前後で「必要」または「とても必要」としたのが（前）88.9%、（後）100%と認識が強まっていた。また、親ががん患者である子どもに対する周囲からのサポートについて「必要」または「とても必要」としたのは、「医療者から」97%、「教育関係者から」97.0%、「保健・福祉関係者から」96.0%で、いずれも高値を示した。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

A. 研究目的

Ⅰ. がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育

プログラム「夏休みキッズ探検隊」

(1) 親ががん患者である子どもが、同じ立場の仲間と出会い、病気や病院について

正しく学ぶことにより、不安が軽減され、レジリエンス（困難を跳ね返す力）が引き出される。(2) 子どもがいる治療中のがん患者に対して、家族全体のサポート体制を提供することで、家庭内のコミュニケーションが促進され、患者の抱える心理社会的な不安を軽減する。(3) 小学生に対するがん教育モデルの一つとして、汎用性を検証する。

II. 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」

がん医療における子どもに対する関わり方について、チャイルドライフスペシャリスト（CLS）、医師、臨床心理士からその具体的な方法、技術を学ぶ。

III. 市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」

地域住民とともに、がん患者（親）とその子どもに対するチャイルドサポートについてのあるり方について考える。

B. 研究方法

I. 「夏休みキッズ探検隊」でのアンケート調査：平成 25 年 8 月 1 日四国がんセンターにおいて、がんになった親をもつ小学生の子ども（参加条件：当院患者の子どもであること（終末期、死別を除く）、子どもが親の病気を知っており参加を了解していること、研究に同意が得られていること）10 名を対象に、認知行動療法に基づく心理教育プログラムを実施し、その前後に子どもと親に対して自己記入式質問紙を配布・

回収した。

II. 「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」でのアンケート調査：平成 25 年 6 月 9 日四国がんセンターにおいて、がん医療における子どもに対する関わり方についてのCLS、医師、臨床心理士から具体的な方法、技術の研修・ワークショップを実施し、その後に参加者に対して自己記入式質問紙を配布・回収した。

III. 市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」でのアンケート調査：平成 26 年 1 月 11 日「つながるいのち～がん医療の現場から～」と題して市民公開講座を開催し、映画『うまれる』の上映、小児科医の講演、がん経験者の対談、臨床心理士の講演後、来場者に自己記入式質問紙を配布・回収した。

〈倫理面への配慮〉

I. については、今後も子どもおよび患者（親）のフォローアップが必要であるため、自己記入式質問紙調査は記名式とした。記入済み回答用紙は個人情報に留意して厳重に保管している。なお、イベント評価の必要性もあり、参加者募集の段階で、あらかじめアンケート調査を行う旨をお知らせし、ご了承いただいた方が応募・参加された。

II. III. については、本調査への参加は個人の自由意思に基づくものとし、自己記入式質問紙調査は匿名で行い、記入済み回答用紙の管理には注意を払い、統計処理の後は直ちに廃棄した。

C. 研究結果

I. 「夏休みキッズ探検隊」でのアンケート調査：

10名回答/10名参加（回収率 100%）

【子どもの背景】がんの親をもつ小学生の子ども 10名/10家族（患者数）、男児6名：女児6名（1年2名、2年1名、5年5名、6年2名）であった。

【親の背景】患者は父親2名：母親8名（乳癌7名、胃癌1名、甲状腺癌1名、血液癌1名）であった。

1) 子どものイベント評価：（図1）

4段階評定（はい：4、まあまあ：3、あんまり：2、いいえ：1）として

平均3.7以上だったのは、「またこんなイベントに参加してみたい」（4.0）、「これからお母さんやお父さんと話がしやすくなると思う」（3.9）、「キッズ探検隊で知り合った友達にまた会いたい」（3.8）、「自分の体を大事にしようと思った」（3.8）、「ほかの友だちの話を聞くことができた」（3.8）、「病院に対する不安や怖さが減った」（3.8）、「病院の食事の大切さを知ることができた」（3.8）、「がんの特徴や治療を知ることができた」（3.9）、「キッズ探検隊に参加してよかった」（4.0）、であった。

（図1）子どものイベント評価



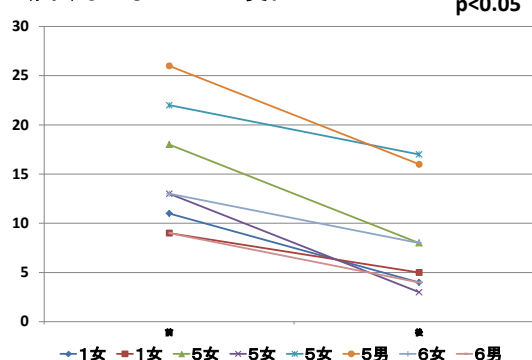
2) イベント前後の子どもの負荷の変化：

（図2、3）

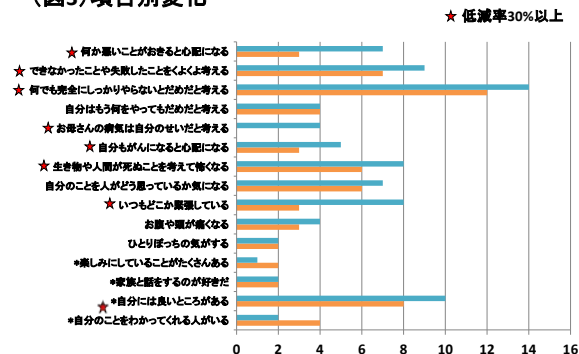
減少した：8名、評価困難（有効回答外）：2名（ $p < 0.05$ ）

項目別変化として低減率 30%を示したのは、「何か悪いことがおきると心配になる」、「できなかったことや失敗したことをくよくよ考える」、「何でも完全にしつかりやらないとだめだと思える」、「お母さんの病気は自分のせいだと思える」、「自分もがんになると心配になる」、「生き物や人間が死ぬことを考えて怖くなる」、「いつもどこか緊張している」、「自分には良いところがある」、の項目であった。

（図2）子どものストレス変化



（図3）項目別変化



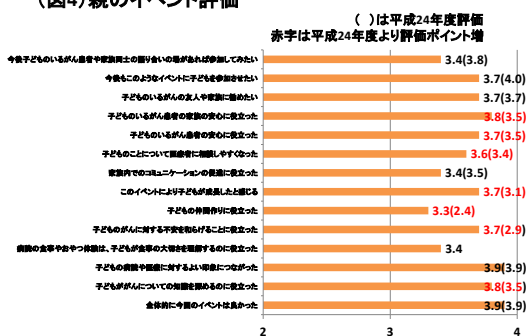
3) 親のイベント評価：（図4）

4段階評定（とてもそう思う：4、まあまあ

そう思う：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1)として

平均3.7以上だったのは、「今後もこのようなイベントに子どもを参加させたい」(3.7)、「子どものいるがんの友人や家族に勧めたい」(3.7)、「子どものいるがん患者の家族の安心に役立った」(3.7)、「このイベントにより子どもが成長したと感じる」(3.7)、「子どものがんに対する不安を和らげること役立った」(3.7)、「子どもの病院や医療に対するよい印象につながった」(3.9)、「子どもががんについての知識を深めるのに役立った」(3.8)、「全体的に今回のイベントは良かった」(3.9)、であった。

(図4)親のイベント評価



II. 「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」におけるアンケート調査

アンケート回答者 34名/参加者 38名(回収率 88.2%)

【参加者の背景】

職種は、看護師 31名、医師 1名、MSW1名、心理職 3名、保育士 2名であった。

1) チャイルドサポートの必要性の認識：

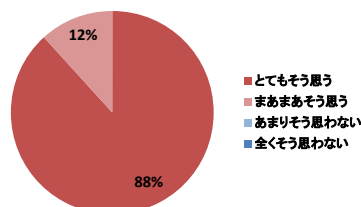
(図5)

「ワークショップ前に比べてチャイルドサポートの必要性をより感じるようになったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」

30名(88.2%)、「まあまあそう思う」4名(11.8%)であった。

(図5)チャイルドサポートの必要性の認識

「ワークショップ前と比べてチャイルドケアの必要性をより感じるようになりましたか？」

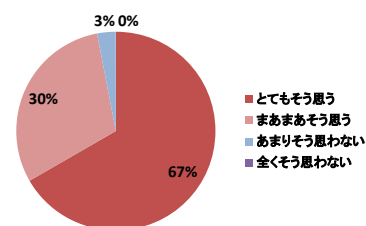


2) 研修・ワークショップの意義：(図6)

「自施設で実施可能なチャイルドサポートに関する取り組みの参考になったか？」との問いに対して、「とてもそう思う」22名(64.7%)、「まあまあそう思う」10名(29.4%)であった。

(図6)研修・ワークショップの意義

「ご自身あるいは自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みへの参考になりましたか？」



III. 市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」でのアンケート調査：

アンケート回答者 121名/来場者 221名(全体の回答率 54.8%、ただし設問によって回答者が若干異なる)

【回答者の背景】

性別(121名)は、男性 14名(11.6%)、女性 107名(88.4%)であった。

年代（121名）は、10代5名（1.7%）、20代5名（1.7%）、30代36名（29.8%）、40代29名（24.0%）、50代21名（17.4%）、60代以上25名（20.7%）であった。

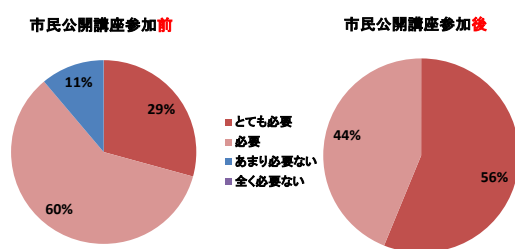
がん経験（116名）については、「自分が患者である」14名（12.3%）、「家族が患者である」44名（38.0%）、自分も家族も患者である1名（0.86%）、どちらでもない57名（49%）であった。

職種別（106名）では、医療関係者44名（41.5%）、主婦32名（30.2%）、会社員2名（1.9%）、保健・福祉関係者10名（9.4%）、教育関係者7名（6.6%）であった。

（1）子どもに話す必要性について、市民公開講座前後での意識変化：（図7）

親ががんを患った際に子どもに話す必要性について「とても必要」または「必要」と答えたのは、市民公開講座参加前では88名（98.9%）、参加後は89名（100%）となった。

（図7）子どもに話す必要性について

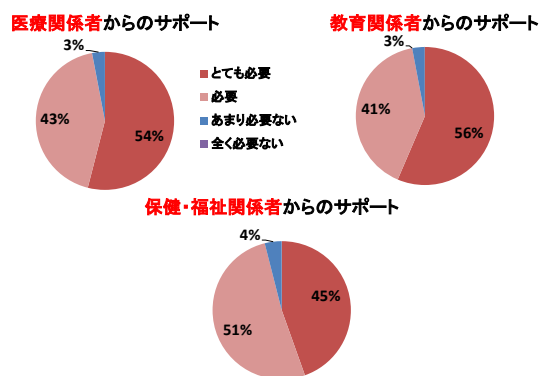


（2）親ががん患者である子どもに対するサポートの必要性：（図8）

周囲からのチャイルドサポートについて「とても必要」または「必要」と答えたのは、「医療関係者から」のサポートについては97名（97.0%）、「教育関係者から」

のサポートについては98%（97.0%）、「保健・福祉関係者から」のサポートについては97名（96.0%）であった。

（図8）親ががん患者である子どもに対するサポートの必要性



（3）自分ががんを患った時の自身の心理的サポートの必要性

自分ががんを患った時の自身の心理的サポートについては、「ぜひ受けてたい」45名（42.9%）、「受けてたい」50名（47.6%）であった。

D. 考察

I. 「夏休みキッズ探検隊」について

子どもについては、昨年と同様に、ほとんどの項目で高い評価を得ており、また、イベント介入前後の子どもストレスについても有意に軽減されており、イベントの目的の1つであった「病気や病院について正しく学ぶことにより不安が軽減され、レジリエンスが引き出される」については、ほぼ達成されたと考えられた。子どもの「自分のことを人に話す」という項目については、昨年と同様に他の項目に比して評価が低かったが、これはイベントが1回限りであり、子ども同士が話をする機会がやはり少なかったためと考えられた。

親の評価は、昨年と同様に子どもに比し

て低かったものの、「全体的に今回のイベントは良かった」との評価を得た。上記の子どもとの評価と同様に、親も「子どもが成長したと感じる」「子どものがんに対する不安を和らげることに役立った」と感じており、「子どものいるがん患者の安心に役立った」との評価に結び付いたものと考えられる。

II. 「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」について

参加者の8割以上の参加者がチャイルドケアについては初めての受講であったが、ワークショップの前後で、がん医療における子どもの心理、行動に対する理解が深まっており、その必要性、理解については参加者の全員に行き渡ったと考えられた。また、32名(94%)が「自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みの参考になる」としており、臨床現場のニーズに即した内容であったことが推察される。実際に研修参加目的として、チャイルドケアに関わっている(今後関わる)または必要とするケースがあったということが挙げられており、今後県内の拠点病院や県内小児科病棟をもつスタッフに対して、ケース検討会、勉強会など、チャイルドサポートをテーマとした継続的な医療者支援が必要だと言える。

III. 市民公開講座つながるいのち～がん医療の現場から～」について

参加者の背景として、女性、30代～60代、職種別でも医療関係者に次いで主婦が多く、(まさに子育て中である方を含む)子育て世代の女性から多く参加いただけた

ものと思われた。また、がん経験については、「自分も家族も患者でない」が約半数(57名、49.1%)であり、がん経験がない市民にとっても関心が高いテーマであったことがうかがえた。一方、職種別では保健・福祉関係者10名(9.4%)、教育関係者7名(6.6%)と、少数ではあるが参加があり、チャイルドサポートについて関心をもっていただけるようになってきたことがうかがえる。

親ががんを患った際に子どもに話す必要性について、市民公開講座参加前後で、「必要」または「とても必要」としたのが(前)88.9%、(後)100%と意識変化をもたらしていた。

親ががん患者である子どもに対して、医療者、教育関係者、保健・福祉関係者からのサポートについてもほぼ全員が「とても必要」または「必要」とし、周囲からのサポートの重要性が認識されていた。

自分ががんを患った時の自身の心理的サポートについても、ほぼ全員が「ぜひ受けたい」または「受けたい」とし、やはり子どもに限らず患者自身についてのサポートが不可欠であると思われた。

以上より、がんになった(子育て世代の)「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であると考えられた。その実現のためには、院内においては、外来・病棟の看護師を中心としたスタッフの協力が不可欠であり、今後もカンファレンスや勉強会での情報共有と啓蒙を進めていく必要があると考えられた。

また、そのような支援について病院など

一機関（施設）ができることはほんのわずかであるため、教育機関や地域保健機関やなどを含めた様々な立場の資源と連携し支援できる体制の整備が必要であると考えられ、今後は、特に教育関係者や保健・福祉関係者を含めた地域住民に対して広く情報発信し、協力体制を構築していく必要があると思われた。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

E. 結論

子どもを含めた家族に対する支援について病院でできることとして、昨年に引き続きがんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラムであるⅠ.「夏休みキッズ探検隊」を内容を発展させて実施した。また、医療関係者を対象とした研修・ワークショップとしてⅡ.「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」を開催し、がん医療における子どもに対する関わり方について医療関係者の理解を深めた。さらに、Ⅲ.市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」を開催し、望まれるチャイルドサポートの在り方について地域住民とともに考えた。がんになった（子育て世代の）「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であるが、病院など一機関（施設）ができることは限られているため、今後も患

者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

F. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

- 1) 清藤佐知子、井上実穂、谷水正人：
「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み～チャイルドケアプロジェクト～」第56回 愛媛乳腺疾患懇話会。
平成25年5月11日。愛媛県松山市
- 2) 井上実穂、清藤佐知子、菊内由貴、谷水正人：「親ががん患者である子どもへの支援～チャイルドケアプロジェクトの効果検証（1）～」第18回日本緩和医療学術大会。平成25年6月22日。神奈川県横浜市
- 3) 清藤佐知子：「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み：チャイルドケアプロジェクト～治療期からのトータルケア～」第21回 日本乳癌学会学術総会。
平成25年6月27日。静岡県浜松市
- 4) 井上実穂、谷水正人：「親ががん患者である子どもへの心理教育プログラム『キッズ探検隊』の開発」第13回日本認知療法学会。平成25年8月23日。東京都豊島区
- 5) 清藤佐知子、井上実穂：「『子育て世代のがん患者』の支援～チャイルドケアプロジェクト～」第51回 日本癌治療学会学術集会。平成25年10月25

日. 京都府京都市

- 6) 井上実穂、宮内一恵、谷水正人：「院内全体で取り組むがん患者・家族への支援 チャイルドケアプロジェクト『夏休みキッズ探検隊』第67回国立病院総合医学会. 平成25年11月9日. 石川県金沢市

3. その他の発表

- 1) 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ『看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～』開催:平成25年6月9日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 2) 「夏休みキッズ探検隊」開催：平成25年8月7日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 3) 市民公開講座開催『つながるいのち～がん医療の現場から～』開催：2014年1月11日. 愛媛県松山市、松山市総合コミュニティセンター

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当無し
3. その他
該当なし